2025 年度 ①

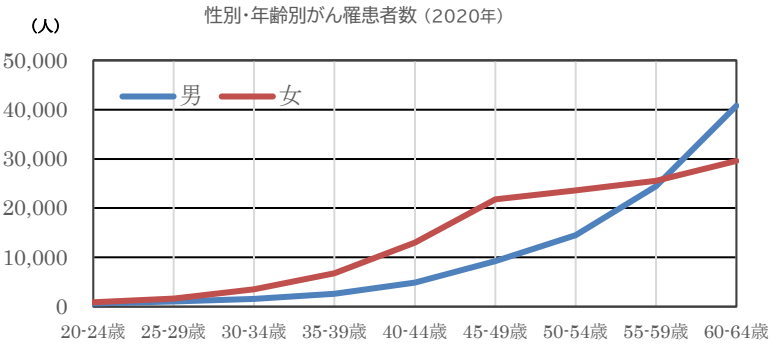
みなと健診センターだより

Vol.42

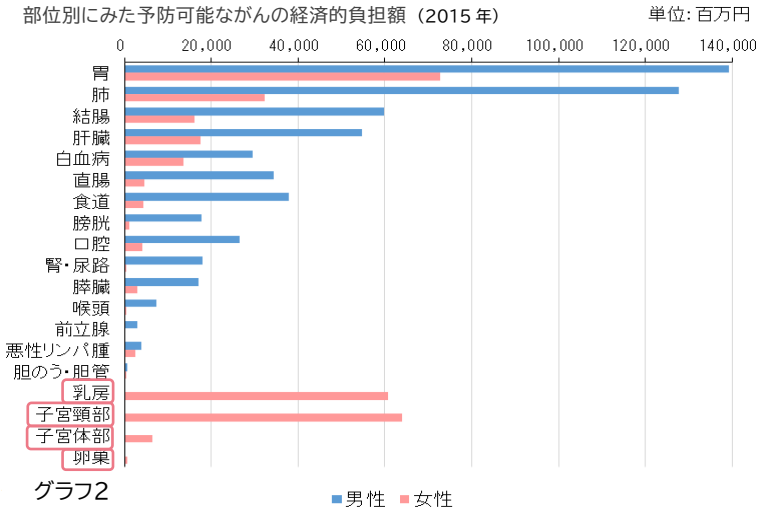
今回のテーマは **大切な命を守るために知っていてほしい女性特有のがん情報** です

女性は人生の段階ごとにさまざまな健康問題があり、女性ホルモンの影響を強く受けます。また、多くのがんは高齢になるほど発症リスクが高まりますが、乳がんや子宮頸がんなどは 20 代から発症するケースも多く、女性特有のがんの発症は若年化しています。

経済的損失　グラフ 1 のように、性別・年齢別がん罹患者数をみると、**20～50 歳代**は女性の罹患率が男性を上回り、これは妊娠、出産、子育てや仕事を中心的に行う時期にあたります。2023 年、国立がん研究センターが、**がん罹患における医療費と労働損失**を推計し、予防可能なリスク要因（生活習慣や環境要因）に起因するがんの**経済的負担**について、男女別・部位別の負担額を発表しました。グラフ 2 が示すように、女性では、最も**経済的負担額**が大きいがんは胃がんで約 728 億円、次は**子宮頸がん**で約 640 億円、3 番目は**乳がん**でした。近年、女性の社会進出が著しく、労働力人口における女性の割合は 4 割以上まで増加しています。そのため、医療費だけでなく**労働損失**という点においても社会に多大な影響を与えていると推察されます。



グラフ 1



グラフ2

女性の身体と心への治療の影響　最も大きな問題は、抗がん剤や放射線治療、手術による**妊孕性**（にんようせい）（妊娠する能力）への影響です。また、身体の欠損、傷跡、脱毛、肌・爪の変色など、外見の変化も生じ、身体的・精神的に大きな負担をかけます。

二大予防　がんを早期に発見するために、定期的に**がん検診**を受けることが大切です。また、**生活習慣の改善**も重要で、①たばこを吸わない、②お酒を控える、③身体を動かす、④食生活を見直す、⑤適正体重を維持することが大切です。さらに、子宮頸がんは**ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種**をすることで予防が可能です。

国が奨めるがん検診	対象年齢	検査項目	受診間隔
乳がん検診	40 歳以上	問診およびマンモグラフィ	2 年に 1 回
子宮頸がん検診	20 歳以上	細胞診または HPV 検査	2 年に 1 回（横浜市は 30～60 歳は 5 年に 1 回）

横浜市立みなと赤十字病院　健診センター

参考：国立がん研究センターがん対策研究所ホームページ

2025 年 4 月作成